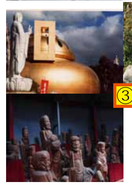
パワースポット

仕合わせの鐘　奪い合いでなく与え合う仕合わせの鐘 ①

弘法大師修行場と四国八十八霊場
密教胎蔵界と金剛界　**マントラ洞窟** ②



しょうじょう寺五百羅漢　奥の院
一木彫りの羅漢像と修行します。永代供養塔

③

日中友好戦争反省平和を祈念して中国のデザインで建立
日本最大の弘法大師　日中友好**再生成就大師**　合格祈願 ④

四国八十八霊場お砂なで ⑤
石手寺は遍路創始の衛門三郎の寺です。霊場参りを重ね砂を安置。撫でて心身を新たに回復します

印度グランプリ作家仏陀石仏群 4頁 ⑥

再生、玉の石　四国遍路開創　衛門三郎縁起 1

南に数里程の荏原の里に、衛門三郎という長者がいた。ある日門前に一人の薄汚れた僧が行き場もなく途方に暮れて「どこでもよいから一晩泊めてくれませんか」と懇願した。三回は聞耳に夢中で聞こえない。僧がしつこく頼むので彼は「おしは忙しい、仕事の邪魔だ、汚いもの、働かないだ」と、突き飛ばし、僧が持っていた托鉢の鉢は落ちて八つに割れた。僧は実は弘法大師であったが俗聞して去り、その後三郎の八人の男子が悉く死ぬ。衛門三郎は、最愛の子をなくし何も手につかなくなる。働き者であった彼を村人はいつしか、「強欲非道の怠け者」と呼ぶようになった。家も荒れ果て、ついに彼は家をすて身を忘れてあの僧に会いたいと出奔する。四国をまわること二十一回、いつしか三郎の姿はあの薄汚い僧に似ていた。彼はある所ではことごとく宿を断られ、ときにやさしく迎えられた。「あぁ、人の心を知りぬれば、さはあらじを」。遂に阿波の国焼山寺の麓で病に倒れ息も絶え絶えになる。その時突然弘法大師が枕元に現れ「よくぞ修行し改心した。望みが有ればかかえよう」と言うと、三郎は「生まれ変われるものならば、領主に生まれ人を助けたい。今度こそはお泊めしたい」と言うと、彼の手に一寸八分の石に衛門三郎と彫み授けた。衛門三郎は安心して息を引き取った。それより幾許の年月をへてかこの地の豪族河野息利に男子が生まれたが右の手は握ったままで開かないので、この寺で祈願したところ手の中から「衛門三郎」と書かれた石がでてきた。そこでこの石を当山に納め、寺号を安養寺から石手寺に改めた。現在「衛門三郎玉の石」は宝物館に安置してある。(仏教入門１参照)

元気石　再生石 3

石を一つ持って帰り、一年したら七浜えて七転び八起きの石として返す。衛門三郎伝説にちなんで、元気と改心、復活を得る。

鬼子母神　子宝石

鬼子母神の境内の石を持ち帰ると子宝に恵まれると伝わる。昔、長寿の為に他人の子をさらっては食らっていた鬼が、ブッダに自分の子を隠され、鬼はその子を慕う母親の思いを痛感する。自分の子がいなくなったことで母心を得て改心し、子宝の神様に生まれ変わった話から、この石の石を持ち帰ると子が授かると伝えられる。授かると二つ石を添えて返す。持ち帰った石には子の名前を書く。御礼参り、着帯安産祈願は有名。初参り七五三をした。

石手寺由来

法華寺文殊の化身出土法隆寺文殊の花園に安置して六七〇年頃最初の霊場を築り大八、二十三箇所を定められる。以来に使用する古面、裏来のうち最古の遺品である。現在で一百有余年その伝を正式により年再現して「お練り供養」として盛大に行われる。式典には衛門三郎役の僧侶が登場し、天人、獅子舞が出現し、奈良時代の様子を再現する。本尊薬師如来で天平元年行基菩薩の開眼による。平安朝より室町時代に至る間が最も隆盛期で寺域も東西数十丁南北数十丁に及んだが、永禄九年兵火のために十二間四面重層の金堂を焼失した。現在、鎌倉の様式をもつ三重塔と共に伊予の秋の風物詩として親しまれている。また、伊予の秋の風物詩として親しまれている。また、伊予の秋の風物詩として親しまれている。また、

⑥
仏陀世界
是非仏陀の庭へ

共感するものは永遠を得る　保身に生きるは地獄を得る

至福

自分の苦を乗り越え
他者の苦を共感し合い
永遠の命を得る**親和連帯**

ぶつかり合う人々の中で、ぶつからず
奪いあう人々の中で、奪わず
与え合う共感の人
人の痛みを知り、喜ばれる喜びに生き
あらゆる所にあらゆる人と楽しく
この世にもあの世にも不死を得る

❻生類の共生
あらゆる所にあらゆる人と
親和して一切所平等平安

❺我が抜苦　見えない矢が突き刺さず
私は自分に刺さる見ずにいた矢を発見した。この矢に突き飛ばされて、私たちは右往左往しぶつかり合う。この矢を抜けばぶつかり合う事いう事はない。

❹人類への共感　人々も和解したいと思いながらぶつかり合う
思いやりの心をもつものは私だけでない。みな同様に救われたい、救いたいと思っている。ここに救済の糸口がある。

❸人類の苦悩　人々もまたぶつかり合う
見よ、人々はぶつかり合い奪い合う。あたかも少ない水に居る魚たちが何も知らずにぶつかり合うように。私はこの苦悩を見過ごすことができなくなった。慈悲の心が出たのだ。

❷敵への共感　敵にも痛みがある
どこを探しても自分より愛しいものを見出さなかった。そのように誰にとっても自分が愛しい。人間は皆一緒である。同じように痛み、同じように悲しむ。

❶生きる苦悩　敵を殺す
仏陀は言う「私は敵を殺そうとして恐れた。相手の痛みを感じたからである」ベトナム戦争海兵隊のアレンさんは言う「私は敵を殺すたびに吐いた。人間を殺すことは出来ない」敵を殺すために相手は人間でない悪い込む練習をしたことを恥じる。

敵を生み出す我欲妄想散対

絶望

人は永遠に他者を良い物にするのか

なぜ人類は、富める者と欠乏する者に分かれ

人と人、国と国が、仲良くできないのか

飢餓と人身売買・敵対のなくなる日は来るのか

ブッダと弘法大師　共感こそ自我を破り永遠の命を得る唯一の通路である

①ブッダ誕生
戦乱の中にゴータマ・ブッダ誕生。

②欲望と快楽
ブッダは言う。「欲望をかなえたいと望んでいる人が、もしうまくいくならば、かれは実に人間の欲するものを得ることに非ず。しかしもし欲望をかなえたことができなければ、彼は矢に射られたように、悩み苦しむ。」
後の経には、神ヴェローニャナ（後のビルシャナ）がいう。「この世の最高は目的と合致することを、快楽を得ることである」と。それに対して経は言う。「それよりも忍耐することは、それ以上に意味があることだ」と。現代日本人は、果たして快楽以上のものを求めるのか。快楽のもとやむなくはないのだろうか。

③生存と苦　ぶつかりあい奪い合っては悲嘆に沈む
ゴータマは、弓の名手であったと伝わる。本当に王子であったならば仕陣は避けられない。彼は言う。「武器を手にして人を殺そうとした時、私は恐怖でふるえ不安になった。人々は生きるために互いに反目しぶつかり合い闘争している。私は平安な場所を求め遍歴したが、どこにも安息所はない。その時である。私は人々の胸を貫く見えない矢を発見した。その矢に突き刺さって人々はおちらこちらへと走り回り、ぶつかりあい奪い合い、悲嘆に沈む。その矢を抜いたなら、人々はぶつかりあうこともないし、悲嘆に沈むこともない。」しかし、実際に矢を抜き、平安を得るまでの道程は長い。●ゴータマの心理を知るために、ヘナムル戦争の海兵隊であったアレンさんの話を読んで欲しい。彼は人殺しをたたき込まれ、人を人とみない見方を教わるが、やがて相手を人間と見る人間性を取り戻す。（仏教入門２参照）

④マガダ王の勧誘　前線で戦うか出家か
マガダ国王のビンビサーラは、ゴータマに言う。「私の精鋭の軍隊と財宝をおまえにやろう。私の先師となり世界を平和にせよ」と。ゴータマは答える。「私は出家をします。私達が欲しがるものろもろの魅惑物には思いのあることを知て、欲望を離れることで安穏であることを見て修行します」これは後世の記述であるが事実の一端を示している。やがてシャカ族はコーサラ国に滅ぼされ、皆殺しにあったと伝わる。ひとしその時、少なくないシャカ族の人々は、ブッダが開いた出家共同体であるサンガに既に出家していて、燃え上がる放棄を悲痛の思いで遠望した。勝つか負けるかではなく第三の道をブッダはつくったのである。●現代も仏教兵制が復活するなら私たちは銃を手にするのか。ベトナム戦争でもイラク戦争でも経還兵が心を病み日常生活が困難になっている。彼らに痛兵拒否は困難であった。ブッダは出家という非暴力の選択肢を開いた。

⑤出家・苦行　諸思想を学び　見えない矢　を発見する
ゴータマは人間の苦しみ、闘争、はかなさ、について考えた。ゴータマは修行者の群れに飛び込み、転々と諸賢人の許で修練する。またもろもろの苦悩の人と出会い人生経験を積む。人はなぜもろもろの苦しみを受けるのか。人間はなぜ戦争をするのか。餓え苦しみ生存闘争に明け暮れ他人を踏みつけるのか。満足しない貪欲、対立し闘争する傲り慢り。無知と他人の痛みへの無関心、傲慢と不信、その根底には人間の欲望があることをつきとめる。心の深奥に潜む見難い矢を発見する。そんな時、６年の苦行の末に菩提樹の下でスジャータ女にもらうお粥は、ゴータマに人々とともに親和する歓対のない安穏な境地をもたらした。それは言いようのない至福の境地であった。ぶつかりあい奪い合うのではなく、与え合う和解と親和なる悟いっしょよの生がある。

⑥克己覚悟　欲望の洪水と戦う、諸事物の私物化を克服
しかし、欲望の魔物が襲ってきた。快楽をなさざれ。財宝をためよ。自分をまもれ。わが一族の為に戦え。敵を滅ぼせ、そして次の魔が来た。私こそがすべてだ。私こそ神だ。悟のもの、私こそを崇拝せよ。そして次の魔が来た。私はこの覚を悟れぬ人々、それでも人々と分かち合おうか。彼は覚る。自分と人間の欲望の魔物が襲ってきた。欲望によって作り上げられた想像の敵である。欲望を静めると、遺物の崇拝は無くなり、世界構想が消められて、正しい知が起こる。諸事物をみだりにするがある。これは何をというように見ること。これは私の何々。これは誰某の何々。これらのもの、これらの事物を所有しようというように、私物化して見てしまうが、それを止めると、私達は欲次から解放され、智恵が生じ、「私には何々がない」といって、悲しむことがない。

⑦転法輪　教えを広め同行を歩む
ブッダの教えはまず明らかでないこと、つまり神の有無やあの世の有無や次の世の有無や次の世の有無などの不明確な見解を捉用しない。なぜなら、それら不確定な見解や思い込みによって人々は妄想し対立し闘争するからである。ブッダは「こうすれば苦がなくなる」という現実を説く。

その上で、ブッダは私達の生存を大洪水と見る。大洪水とは、私達の一人一人が欲望の激流であり、欲望によってあれこれと自己中心的に妄想し、私物化して駆逐物のどアキサワールドを映し出し、その自我の欲望世界のぬり込みに即て、ぶつかりあい奪いあって互いに傷つけあっているのであるが、また、互いに欲望妄想を満たしあって、欲望の激流と激流が刺激し合い、ぶつかりあいの全体としての大洪水をつくり出していると様相である。この大洪水を停止するには諸事物の私物化を停止する。欲望を制御し私物化を停止する。その時、私達は彼らとともなく捨てることもなく、一切所平等平安となる。（仏教入門２参照）

⑧サンガ生活共同体　皆一緒に生きる場所をつくる
ブッダの功績は教説以上にサンガの創始である。彼は誰でも受け入れた。被差別者アウトカーストの者、元罪人、亡命者など、生まれた時のまま、過去を問わず一切を受け入れる再生の場所がサンガであった。ブッダの所へ多くの悩める者が来た。子を失くしたゴータミ。人間扱いされなかった職人のパリ。娼婦アンバパーリー。盗賊アングリマーラ。彼はブッダに感化され刃剣を捨てて出家を願った。ブッダは「さあ来なさい、修行者よ」と言った。これによって、かれは修行者の資格を与えられた。多くの人が出家するので、ビンビサーラ王は、罪人については制限しようとしたほどであった。サンガは、王権から独立し非暴力、非差別を実現していた。その一方で、私有財産は制限され、衣食住の住は共有であった。衣食も多くは皆で分け合っていた。そして何よりも、一切所平等平安の境地を得ることが目的であった。

⑨寂滅

⑩アショーカ王の反省と帰依　仏教興隆と新時代
アショーカ王は、インドを統一するために全ての敵とを多くの人を殺し、川が死体と血で満ちているのを見て、殺戮を深く反省したという。そして不殺生を誓い、仏教に帰依した。それはブッダの滅後、100～200年のことである。既に、ブッダは武器を取ってぶつかりあうことの非情さを前にして、自分の欲望をコントロールし、諸人と親和して平等平和であることを説いていたが、アショーカ王は、殺戮の後になってやっとその思いに至る。殺戮をしては反省して平和を説き、平和ぼけしてはまた殺戮して後悔する。人類はこの繰り返しに陥れている。これこそ輪廻というにふさわしく、ブッダの言う大洪水である。日本が今有する憲法こそも、大乗仏教思想という欲望による虚妄妄想の殺戮の末に至った境地である。「私達は平和を愛する諸国民の思いを信頼し、再び戦争の惨禍のないように不断の努力をしていく」。その趣旨はこうである。そのことをブッダは2500年前に説いている。そして戦いに堂宇と仏像が立てられ、戦いに人々が戦争で死に餓い合いに苦しんでいる。堂宇は完成しても、ブッダ再来は遠い。